



## 小林如泥

東日本建設業保証株式会社  
建設産業図書館  
**江口知秀**  
Tomohide Eguchi

**松** 平直政が松江城の妖女との約束を守ったためか、松平氏は幕末まで出雲を治め続けることができた。そして、その七代目に茶人大名として有名な松平治郷がいる。彼は文化三（一八〇六）年に隠居すると剃髪して「不味」と号し、茶道をもって松江の文化を大いに振興した。今でも松江で茶が盛んなのは、不味公の影響による。

さて、その松平氏歴代の墓所が、松江城からほど近い月照寺にある。墓に興味は無かったが、夜な夜な松江の街を徘徊したという大亀の石造もあるので行ってみることにする。

月照寺の境内は綺麗に整備されており、木々も茂って美しく、さすがに名刹の趣がある。順路に従って進むと、すぐに不味公の墓所に行きあった。説明板を読むと、廟門は小林如泥の作だという。これは、ちょうどよい。説明書きには続けて、如泥は不味公の五年前に亡くなったから、生前に設計したものである、などと頼りないことも書かれているが、せつかくだから、小林如泥について触れてみたい。

小林如泥は、雲州松平氏初代の直政と共に信州松本から松江に移り住んだ大工の子孫で、指物や曲物を得意とし、不味公の寵愛を受けながら数々の名品を残した。

「如泥」の号は不味公から剃髪を命ぜられた折に授けられたという。真偽さだかではないが、坊主頭を嫌がる如泥を酔わせて、「泥の如く」眠りこけているうちに、ツルツルに剃りあげてしまった。よって如泥という。石川淳の『諸國畸人傳』によれば、松江の人々は「ジョテイ」と読むらしい。

如泥の名人ぶりは、さまざまな伝説を生んだ。たとえば、彼の作った小さい亀の彫物が泳いだとか、ある大名のお抱え彫師とネズミの彫物で勝負をした際に、鏝節でネズミを彫ったので、猫が啞えて勝利したなどといったもので、まるで講釈師が語る左甚五郎のようなのだが、こちらは文化十年（一八一三）年に六一歳で病没するまで実在した。

その証拠として如泥の作品は、東京国立博物館にも保管されており、同館ホームページから「小林如泥」で画像検索をすると、二つの作品がヒットする。そのうち麻の葉の陰陽透かしを施した袖障子は、あの高村光雲をして「是は必死の力で作った、是は洒落や道楽の仕事で無く、珠のやうな汗を掻いて一心不乱になった仕事だ」と絶賛せしめるものだ。材料は桐で厚さは約二センチもあるのに、スッキリと精巧に麻の葉の模様が透かしてある。しかも切り口が、鉋をかけたように磨かれているので、百年たっても

透かし部分にホコリが溜まることもない。糸鋸も無い時代にどのような細工をしたのか。如泥は弟子を採らなかつたので、技を継いだ者がおらず、その方法が伝わっていないのが惜しいと、光雲は歎いている。

最後に如泥とは関係ないが、大亀の石造は不味公の父にあたる六代藩主・宗衍の墓所前にあり、想像以上に大きかった。



月照寺にある松平不味公の廟門

【交通】JR松江駅から徒歩約40分／一畑電車北松江線の松江しんじ湖駅から徒歩約15分